

2021 (令和 3) 年度 共同利用研究・研究成果報告書

研究課題名	和文：極低濃度ラドン測定システムの開発 英文：Development of low concentration radon detection system
研究代表者	中村 琢
参加研究者	岐阜大学教育学部・准教授・中村 琢 岐阜大学情報連携統括本部・教授・松原 正也 岐阜大学生命科学総合研究支援センター・技術職員・三輪美代子 岐阜大学・名誉教授・田阪茂樹 東京大学宇宙線研究所・准教授・関谷洋之 東京大学宇宙線研究所・研究員・Guillaume Pronost
研究成果概要	<p>本研究はスーパーカミオカンデ実験のバックグラウンドとなる、放射性ラドン源の動態把握と低減を目的としている。2021 年度に、神岡の坑内の環境中のラドン濃度モニターと動態の把握、坑内側溝水のラドン濃度測定、栃洞坑内のラドン濃度測定、液体シンチレーション法によるラドン濃度測定、型ラドン計の較正を行った。</p> <p>環境ラドン濃度の測定</p> <p>神岡坑内全体の環境のラドン濃度をモニターし、坑内のラドンの挙動を把握するため 1L サイズの小型のデータロガーを多地点に設置している。2021 年は新規に 3 台増設し、神岡坑内に 21 台、SK エリアに 13 台設置してリアルタイムの環境ラドン濃度を最長 9 年にわたりモニターしている。SK エリアでは、季節変動、日変動など、坑内空気および人の動きとの関係を観測した。</p> <p>カムランド実験エリア前の源水中のラドン濃度について、連続測定の結果と、液体シンチレーション法の 21 回分の濃度データを用いて、80L ラドン計を較正した。</p> <p>神岡坑内の茂住断層から出る水のラドン濃度を液体シンチレーション法により測定した。これまで坑内の上流から下流の 5 地点の観測を継続した。2020 年度に新たに測定地点を増やした計 11 地点で 4 回、測定した。カムランド実験エリア前 17.3 ± 0.2 Bq/L、断層水合流地点の手間支流 8.4 ± 0.2 Bq/L、合流後 3.5 ± 0.1 Bq/L、SK 前 2.1 ± 0.1 Bq/L を得た。上流から下流にかけてラドン濃度が低下している傾向がこれまでの結果と一致し、さらにラドン濃度の高いエリアを絞り込めた。これらの結果は、坑内の流水の流れにより気液混合が進み、大気中にラドンが開放されていることを示すものである。また、冬季にラドン濃度が高く、夏季に低くなる季節変動を観測した。</p> <p>同じ手法を用いてハイパーカミオカンデの栃洞坑道の断層水のラドン濃度を計 4 回測定し季節変動の傾向を得た。</p>
整理番号	